

子午線の祀り  
本順二



# 木下順二 子午線の祀り

河出書房新社

子午線しごせんの祀まつり

© 1979

著者 木下順二 装画者 深尾庄介 発行者 清水勝

昭和54年2月20日初版発行／昭和54年4月25日3版発行

〒162 東京都新宿区住吉町九五 発行所 株式会社 河出書房新社

電話東京(355)5311(営業) (355)5321(編集)

振替東京0—10802

印刷 暁印刷株式会社 製本 中央精版印刷株式会社

定価は函・帯にあります 落丁・乱丁本はお取替えいたします

# 子午線の祀り

読み手 A

重衡の北の方

越中次郎兵衛盛嗣

武士 2

読み手 B

舞姫（七人）

悪七兵衛景清

武士 3

人々

影身の内侍

三郎左衛門景経

梶原平三景時

大臣殿宗盛

平三左衛門重国

和田小太郎義盛

源太景季

右衛門督清宗

新居紀四郎親清

浅利与一

平次景高

新中納言知盛

右京亮晴信

九郎判官義経

三浦介義澄

修理大夫経盛

水主

武蔵坊弁慶

船所五郎正利

能登守教経

阿波民部重能

伊勢三郎義盛

安芸太郎

平大納言時忠

山鹿兵藤次秀遠

佐藤四郎兵衛忠信

次郎

二位の尼

松浦の党の者

武士 1

郎党

建礼門院

武士 1

郎党

夜。満天の星。

**読み手 A** 晴れた夜空を見上げると、無数の星々をちりばめた真暗な天球が、あなたを中心に広々とドームのようにひろがっている。ドームのような天球の半径は無限に大きく、あなたに見えるどの星までの距離よりも天球の半径は大きい。

地球の中心から延びる一本の直線が、地表の一点に立って空を見上げるあなたの足の裏から頭へ突きぬけてどこまでもどこまでも延びて行き、無限のかなたで天球を貫く一点、天の頂き、天頂。

地球を南極から北極へ突き通る地軸の延長線がどこまでもどこまでも延びて行き、無限のかなたで天球を貫く一点、天の北極。

遠く地平の北から大空へ昇って遙かに天の北極をかすめ遙かに天頂をよぎって遠く地平の南へ降る無限の一線を、仰いで大宇宙の虚空に描きたまえ。

大空に跨って眼には見えぬその天の子午線が虚空に描く大円を三万四千四百〇〇キロのなた、角速度毎時一四度三〇分で月がいま通過するとき月の引力は、あなたの足の裏がいま踏む地表に最も強く作用する。

そのときその足の裏の踏む地表がもし海面であれば、あたりの水はその地点へ向かって引き寄せられやがて盛り上り、やがてみなぎりわたって滴々とひろがりひろがる滴ち潮の海面に、あなたはすっと立っている。

(暗転)

## 第一幕

明るくなる。

群読の人々がいる。(以下「人々」と略)

読み手B (「人々」の一人) 『平家物語』巻第九より。寿永三年二月。一の谷の合戦に、鴨越

より義経の奇襲を受けて平家散々に敗れ、再び四国屋島へ引き退くこと。

人々 新中納言知盛の卿は、一の谷、大手生田の森の大將軍にておわしけるが、その勢みな逃げ討たれて、今はおん子武藏の守知章おん年十六歳、お供には監物太郎頼方、ただ主従三騎になつて、助け船に乗らんと汀のかたへ落ち給う。

ここに児玉党と覺しくて団扇の旗差いたる者ども十騎ばかり、おめいて追っかけ奉る。その中に大将と覺しき者、新中納言に組まんと馬馳せ並べけるを、おん子武藏の守知章、父討たせじと中に隔てて割って入り、馬押し並べてむずと組んでどうと落ち、取って押えて首を搔き、立ち上がらんとし給うところに、かたきの一人馳せつけて、武藏の守の首を討つ。

監物太郎その上に落ち重なつて、武藏の守を討ち奉つたるかたきを討つてンげり。そのうち矢種のあるほど射尽くして、太刀抜いて闘いけるが、かたきあまた討ち取り、弓手の膝口を射られて立ちも上がらず、坐ながらに討死してンげり。

知盛（人々の一人） このまぎれに新中納言知盛の卿はそこをふつと逃げ延びて、究竟の名馬には乗り給えり、海へざつと打ち入れ海のおもて二十余町を馬泳がせて、兄大臣おおい殿宗盛の卿のおん船に乗り移つて助かり給いけり。おん船には人多く混み乗つて、馬立つるびょうもなかりければ、頭かしらを磯へ引き向け、一鞭当てて汀へ追つ返す。

重能（人々の一人） やあ新中納言殿、その馬そのまま追つ返されましたでは、磯へ泳ぎ戻つてあの名馬、かたき源氏のものになってしまいます。阿波の民部大夫重能、射ころしましう。（矢をつがえる）

知盛 やめる民部、矢<sup>や</sup>番<sup>つが</sup>えするな。

重能 いいや射ころします。おん大将のあのおん乗料<sup>のりしろ</sup>、あのまま源氏の手に渡しましたでは

——（引きしぼる）

知盛 射るな民部！ 外せ外せ外せ！

重能 なにゆえおとどめになります？ おん大将の誉れを担うたあの馬、平家武門の意地を背

負うたあの馬を、なにゆえかたきの中に放たれます？

知盛に、ある躊躇がある。その間に舞台は、知盛一人の姿を残して急速に暗く  
なっていく。

知盛 ——なぜとめるのだおれは。以前のおれなら一議に及ばず射ころさせておったであろう  
に——そう思っておるうちに、もうすらすらと声がおれの口から出てしまっていた。

言い終った時は、知盛の姿を残して真暗になり切っており、その暗闇の中か  
ら——

声（のちに影身の内侍を演じる女優の）「誰のものともならばなれ、わが命を助けたらん馬を——」

知盛 そういつているのはおれ自身なのか——と思いながら、おれは自分の声を聞いていた。

声（同じく）「射るびょうもなし」とのたまえば——

人々の声 余儀なくして射ざりけり。

馬は主の別れを慕いつつ、暫しは船をも離れやらず、沖のかたへ泳ぎけるが、船次第に遠くなりければ、主なき汀へ泳ぎ帰る。足立つほどにもなりしかば、なお船の方をかえりみて、二、三度までこそいななきけれど。

知盛 それから兄大臣殿のおん前に行つて坐ると、次から次に取り乱した言葉が口から流れ出るのをおれはどうとどめようもなかった。

声（同じく）新中納言知盛の卿、兄大臣殿宗盛の卿のおん前に参つて申されけるは、「息、武蔵の守知章にはおくれ候いぬ。監物太郎も討たせ候いぬ。今はただ気もめいるばかりに心弱うこそまかりなつて候え。いかなる親なれば、子はあつて親を助けんとかたきに組むを見ながら、いかなる親なれば子の討たるを助けもせて、かように逃れ参つて候らん。も

し人のことで候わば、いかばかりもどかしゅう存じ候うべきに、わが身の上になりぬれば、よくよくに命は惜しいもので候よと、今こそ思い知られて候え。人々のなにも思われん心の内どもこそ恥ずかしゅう候え」とて、袖を顔に押し当てて、さめざめと泣き給う。

宗盛（「人々」の一人。バストが照らし出される）大臣殿宗盛の卿、これを聞き給いて、「ま

ことに武蔵の守の父の命に代わられけるこそ類いあり難きことなれ。手も利き心も剛に、よき大將軍にておわしつるものを。わが子衛門の督と同年にて、今年は十六な」とて、おん子衛門の督清宗のおわしける方を御覧じて涙ぐみ給え——（消える）

人々の声 並み居る平家の侍ども、心あるも心なきも、みな鎧の袖をぞぬらしける。

知盛の姿のみそのまま残り、暗闇はやがて満天の星空となる。

その星空の下に影身の内侍の姿がある。波の音。

知盛 今宵もまた立っているのかこの磯に、女よ。あれからの十日あまり、来てみればお前は、いつもこの磯に立っている。

影身 十日あまり——十日あまりがもう過ぎましたのでしょうか、あれから。

知盛 哀れなやつ、日数も覚えぬほどに彼がこと思い詰めて、海を眺め暮らしていたというのか。

影身 海は、碎ける波頭がいろいろと思いを散らしてくれます。

知盛 少しはこころ安んじるがいい。彼は捕われても確かに生きていると、ひそかに見届けて来た者がある。

影身 え？——

知盛 (やがて) ところで——あの晩おれが問いかけた問いに、影身よ、十日あまりが経ったというにまだお前は答えてくれぬな。一の谷から淡路の瀬戸をやっとどうやら漕いでぬけて、やっと再びこの屋島に吹き戻されて来たあの晩、今宵と同じ満天の星の下この磯でおれがお前に問いかけたあの一大事の問いに。——もっともあの晩は、答えを聞く前に邪魔がはいった。

影身 邪魔がはいってわたくしは救われました。でなければ、いつまでも黙っていなければならませんでしたもの。

知盛 いいや、お前は答えねばならぬ。この十日あまり、おれはお前の答えを待っていた。世に敵島の内侍と呼ばれる影身は巫子だ。平家の氏神、安芸の敵島大明神に仕えまつる舞姫

ではないか、お前は。

影身 一藤二藤の偉い内侍さまがたと違って、影身はただ大勢の一人でございます。

知盛 生まれは近江の百姓の子といつか聞いたな。だがあれはもう何年の前になる？ わが父

故入道相国清盛公、京、西八条の屋形に後白河院をお招きのおり、花を挿頭し大口を着て舞うた八人の内侍のお前は一人だったが、その舞い姿が、やがて十何年もの昔にいた祇王という白拍子にあまりに似ているという者があつたのへお前は、知るはずもない祇王の身の上を、野州、江部の里に生まれた日のことから始めて、祇王その人になつたかとばかりこと細かに、生き生きと語つたというので評判になつた。

影身 小耳にとまっておりますた古い噂の切れ切れが、語っていますうちいつかわが身のことのように思いこまれて、心現になつてしまつただけでございます。——もう十日あまりが過ぎましたのでしうか、この屋島の磯に着きましてから。

知盛 その十日あまりが、一日のことのようにも一年のことのようにも思われるのだ、おれには。

影身 一刻のことのようにも、十年のことのようにも思われます、わたくしには。

知盛 十年というならその十年のあいだを毎日毎日、おれは兄大臣殿の大船おおふねの中で評定ばかり

だ。評定ばかりだが、何一つことは進まぬ。負け戦さの後仕舞は、新しい軍立てよりほどの難儀よ。先に目当てがなくなると、人はみな済んでしまった失敗にばかりこだわらる。敵はこちらを見据えて、次なる謀りごとを組もうとしているのにな。

見ろ、きららかな北斗だ。破軍の星が大分南へ回って、夜のふけたことを告げている。

(突然) 影身よ、今宵お前に頼みがある。都へ上ってくれ。

影身 え？ 都へ、わたくしが？

知盛 そうだ都へ。

恐ろしいか？——蒲の冠者範頼、九郎判官義経を頭とするかたき源氏の軍兵が都には充ち満ちていよう。しかし御修法の修験者や僧侶と同じに、巫子、舞姫を見とがめる者はない筈だ。

わが叔父御薩摩の守殿の首、いとこ無官の大夫敦盛や中宮の亮以下、わが子武蔵の守知章の首もみな、西獄門の樗の木に高々と、赤い布に名をしるして懸け晒されてあるそうな。会うてやって来てくれぬか、影身。

そして先程もいうたように、お前を思い人としてここまで伴って来たわが弟本三位の中將重衡は、ただ一人の生け捕り人として八条堀川のみ堂に押しこめられ、土肥の次郎が守護

していると、見届けてきたものがある。

影身（やがて）仰せ付けの御用は、何なのでございましょう？

知盛 お前は知らずとも向うがお前を見知っている男に、ひそかに書状を届けて貰いたいのだ。あの西八条の屋形で舞うた日に、末座の蔭からお前を眺めていた男、今は東山双林寺の山荘に住むもと北面の武士、今様の名手で後白河院の御寵愛深い男だ。引き受けてくれ、影身。本三位の中將と会うてだても頼んでやろう。一刻いっぴくとも十年とも思える時の刻みきざしがおれの氣持を追いつめている。今ここで後白河院の側近を頼って、何としてでも平氏と源氏和平の儀を院にはからって頂かねば、徒らな首の取り合いが続くばかりで先は地獄だ。

影身 平氏と源氏が仲直りを遊ばしますか？

知盛 そのために影身に頼むのだ。摂津渡辺の津まで船を仕立ててやる。渡辺の津から京の都までは、男の足なら一日の道のりだ。——会いとうないのか、本三位に？

影身 新中納言さまが行けとおっしゃいますか？

知盛 そうだ、この知盛が頼むのだ。よいな、影身？

影身 ——上りましょう、都へ。——わたくしでお役に立ちますならば。

知盛 そうか。受けてくれるか。受けてくれるか。お前でなければならぬのだ、影身。すれば

おれはこれから精魂を絞って書状を書く。船はあすの晩、仕立てよう。付き人も忠実な男を選んでやる。そうか、引き受けてくれるか。礼をいうぞ、影身。

ならば影身、今宵こそ答えてくれ、あの夜の問いに。十日あまり前のあの夜、おれはこう問うたはずだ。——「負け戦さ——わが子武蔵の守知章を眼前に見殺しにして逃げたこと、

——馬を敵の手に放ったこと——その一つ一つが、すべてはそうなるはずのことであった」といふ思われるのはどういふことだ？　それが何であるのか、いつどこでかは分らぬがいずれは必ず——」——待て、誰やら近づいてくる気配がする。去れ。

### 影身

京からきつと戻って参ります。思いを籠めて現心のお答えをいたします。いつまでも影身、新中納言さまのおそばにいらしてくださいますもの。(去る)

### 知盛

なに？　わがそばに？——(大きく)誰だ？——(苦笑)あの晩もこのように邪魔がはいったな。一の谷からやっと再びこの屋島に吹き戻されて来た十日あまり前のあの晩、この一大事の問いかけをこの磯でおれが影身に問いかけようとしたとき、阿波の民部大夫重能という邪魔がこういいながらはいって来た。「民部でございます。いま誰かここにおりましたような。違いましたか？」